

は一定不動なものでは無く、その現在の形式に達する迄には、種々な道程を経過したる筈であり、また現在の形式さへも、自ら進歩變化して、他の新しい形式に代ると云ふ事は、盲目に非らざる限り、否認する譯には往かぬ。

予は此の論文で、財産が資本的形式を装ふに至れる以前の、その種々なる形式を研究しやうと思ふ。で、本論に入るに先だつて、予が此の歴史の部分的改造の上に用ひた方法に關し、一二特殊な點を前置して置かねばならない。

人間は悉く、人種、皮膚の色の區別無く、搖籃から墳墓に入る迄、發達の同一諸相を通過する。人間は年齢に依り、種族、氣候、生存及び状態に従つて、狭い範圍で異なつては居るが、成長、成熟及び老衰の同じ劇變を経験する。それと同じく、人間の社會もそれに應じた思想を以て、同じやうな社會的、宗教的、及び政治的形式を通過するものである。で、この歴史的發展の大原則を會得した、第一人者たるの名譽は、『歴史哲學の父』と稱せらるゝ、*ギイコ*に歸せられべきものである。

その著『*新・哲學*』の中で、*ギイコ*は『人間が如何なる野蠻、獷猛、又は未開の時代から、牧畜に向つて進歩し始めても、有ゆる國民の歴史は、理想的な、永遠な、歴史の上を通過つて來た』と説いて居る。

若し吾々が、野蠻状態から文明状態までの一民族の歴史を採知し得たとすれば、吾々は地球上に棲息せる各民族の、代表的な歴史を持つた事になるに違ひない。その歴史を改造する事は、吾々の手には到底及ばない。と云ふのは、一民族がその進化の經路中に、一段づゝ上つて來た階段を、ま

だ下ると云ふ事は吾々に取つて不可能だからである。けれ共、一國民、又は一民族の此の歴史を、切れ切れに截斷する事は出來ないが、吾々は兎も角も、地球上の異なる民族に關して、吾々の持つて居る分散せる材料を共に繋ぎ合せて、それを改造する事は出来る。人間が年を取るに連れて、その幼時の物語りを解釋するやうになるのも、また實に之れが爲に外ならぬ。

文明國民の祖先の慣例習俗は、文明が未だ全く亡ばしきらぬ野蠻人の間に殘存して居る。東西兩半球の學者の行つた、野蠻人の習俗、社會的及び政治的制度、宗教的及び知識的觀念等の研究は、もう全く失はれて了つたものと思はれて居る過去を、吾々にも想起させるのである。が吾々は野蠻人の間に、財産の起原を見出す事が出来る。吾々は地球上の諸地方に於ける事實を拾ひ集め、それを論理的に並べて、以て財産進化の異なる諸相を辿る事が出来る。(Paul Leatham, 莊畑勝三)